

氏名	山田 彩加
ヨミガナ	ヤマダ アカ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第427号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 命の繋がり ―芸術的観点から探求する生命の本質― 〈作品〉 生命の変容と融合 ―0への回帰― 手向けられた花をも、命と共に 霞ゆく情景 memento mori

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	東谷 武美
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	佐藤 直樹
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	三井田 盛一郎
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	坂田 哲也

（論文内容の要旨）

序論

「命の繋がり」とは、宇宙の誕生から過去・現在・未来を通じて、全ての時間と空間の中で生じる命の連鎖である。宇宙の誕生から現代までの約数百億年の間に、万物の基となる物質は、様々な惑星（太陽系・地球等）を形成した。地球上で誕生した原始生物が、進化と共に絶滅と生成を繰り返し、種の多様性を得て過去・現在・未来を通じて共存している。命の連鎖とは、森羅万象に共通する最小の物質（粒子）から細胞が誕生し、多種多様な生物へと進化を経る中で、生と死を通じて生物から再び粒子へと還元される一連の過程であり、更なるその生成と分解を全ての生物が同様に繰り返すことである。その一連の中で、生物は時代毎に子孫を残し、自らの遺伝情報の伝達と種の保存を本能的に行っている。生物間の異種・同種が互いに関連し共存する上で、生存維持に必要な環境や活動が成り立っているのである。

「命の繋がり」を創作概念として確立したのは、生物間における形態の類似性に感銘を受けたからであった。現在の生物間に見られる形態や性質¹の類似性は、全ての生命がある根源的な共通祖先（原始生物）から多種多様に進化した存在であるということを示唆している。原始生物を構成しているのは、極めて小さな物質（粒子）であり、これを「物質的な命の本質」とする。それらの物質は森羅万象を構成し、生物の生と死を通して過去から未来に掛けて輪のような一連の繋がり、「命の連鎖」を形成していると考えられる。しかし、多種多様な生物の中で、人類は他の生物より脳が進化し、約数千年の間に生命活動に加えて極めて理知的な活動を営んできた。進化と共に知能や心、精神の働きは複雑化し、それらが蓄積された固有の存在が全て無に帰するという「死」の存在について、人類が考察し始めたことは必然であった。「死後肉体は消滅する。では、心や精神、我々の存在と行方はどうなるのか」という極めて不明瞭な問題を浮き彫りにし、また未解決のまま、未だ問い続けているのである。

本論文では、まず、心や精神・意識等の「形而上的な存在」の根底を成すものとして、「形而上的な存在の本質」が存在すると仮定する。物質的な存在の本質が、生命の死後自然へと還元され循環していくことに対して、形而上的な存在の本質はどのような状態を持って変化し、或いは存在するのかについて、芸術的観点から考察する。

¹毛細血管と植物の根等の形態や、恒常性・自己複製能力・エネルギーの変換を行う等の性質。

本論文の構成は以下の通りである。

第1章 本質の探究方法

本章では、万物が形成するマクロコスモスに対応した、一つの生命の内に形成されるミクロコスモスの観点を基に、様々な哲学的方法論や、それに基づく芸術作品を参照する。その上で、「形而上的な存在の本質」が、過去・現在・未来においてどのような状態を持つのか、また繋がりを形成するののかについて探求する。第1節「心とは何か—形而上的な存在と、その本質について」では、「形而上的な存在」である心や精神、記憶等の現世に纏わる固有的な意識、またそれらの本質的存在について考察する。心等の形而上的な存在は、生きている限り身体という物体に付随する形で存在している。心や精神或は魂であり、その本質は死後、物質である身体と不可分な関係から解放される中で、どのように状態を変化させるのか。また、物質の循環と同様に繋がりを形成するののかについて、探求する。第2節「超自然的存在について」では、超自然的存在（すなわち神の存在）について参照する。理知的な働きを行う脳を持つ人類は、古代から超自然的、すなわち神の存在を信じていた。この超自然的存在に基づく思想が、私達人類の身体と精神を分類し、心であり精神或は魂の存在が、異世界を通じて延々と繰り返すことを認識付けたのである。第3節、「意識の純化」では、形而上的な存在の本質を見出すため、理性的な意識の純化（既成概念の純化）を行う方法について考察する。第1項「超越的自覚への探求」では、形而上的な存在の本質を見出す方法として、存在論を考察する上での現象学の方法を参考とし、意識の純化（既成概念の純化）を試みる。「我思う、ゆえに我あり」というルネ・デカルト（1596～1650年）の言葉は、全ての存在に確実性が無い中で、唯一の確実な存在として認識されるのが「自己」であることを決定付けた。これはミクロコスモスの観点に基づいて、「存在」についての真の本質が、自己を自己の内に向けて深淵に探求する上で見出せる可能性を示している。第2項「終末へ向かう存在」では、第1項で試みた意識の純化から、存在の本質へと近づく方法について、マルティン・ハイデッガー（1889～1976年）の著書『存在と時間』を基に、考察する。ハイデッガーが導きだした「存在の本質」へと近づく方法とは、「死を自覚すること」、「死に直面すること」であると推測された。第3項「フランシスコ・デ・ゴヤ—四大版画より」では、ハイデッガーの思想から連想する画家として、フランシスコ・デ・ゴヤ（1746～1828年）の作品である《四大版画》を参照する。これら一連の作品からゴヤは、理性の中にこそ、人間としての「真の本質」があると考えていたと推測される。人間としての「真の本質」とは、すなわち「理性（理性の光）」であり、これは根幹となる生命の本質に加味されたものであると考察する。人間とは、理知的な精神（理性）を持つ生物である。その中で、純化された意識、形而上的な存在の本質を探求するためには、人間を「人間」として成立させる理性（高度な意識）を排除するのではなく、「純化」しなければならない。「純化する」とは、人間と不可分な関係である理性（意識）の、更に奥へと思考を重ねて行くことである。本項では、ゴヤの理性的な思想と、超現実的・幻想的な思想とを対照し、存在の本質の展開を試みる。

第2章 時間という概念

本章では、マクロコスモス的な観点において、科学的な考察を基に、時間と空間の密接な関係について考察する。形而上的な存在でありその本質を含む万物は、時間や空間と密接な関わりを持っている。また、時間や空間には形がなく、概念的なものである。以上の関連性から、生命の生と死、万物の創造に深く関わる時間や空間の「真の本質」を考察することが、形のない存在の本質を見出す鍵になるのではないかと推測された。その上で、第1節「時間という象徴Ⅰ—時間と空間」では、世界的に著名な科学者である、アルベルト・アインシュタイン（1879～1955年）の研究の一端を参照し、真の時間について考察する。また、現在研究されている多次元空間やゆらぎの存在について参照し、存在の本質を見出す可能性を探る。第2項「時間による象徴Ⅱ—メメント・モリ」、第3項「時間による象徴Ⅲ」では、形而上的な概念（時間）を芸術的観点から考察する。形而上的な存在を探求する上で、アルブレヒト・デューラー（1471～1528年）の銅版画作品や、納骨堂での装飾を参照し、時間の経過を表す芸術的モチーフ（芸術による概念の象徴化）について着目する。時計や砂時計、骸骨、枯れた植物等は、「メメント・モリ（死を想え）」というメッセージを含み、死を象徴する芸術的なモチーフとして用いられてきた。これらのモチーフは、時間の経過と共に近づく死の出来事や肉体の老化・消滅を、間接的に示唆している。このように芸術作品は、形而上的な存在を実存する物質と結び

つけ、象徴化することが可能なのである。

第3章 創作過程及び作品について

本章では、以上までに考察した探求方法を踏まえて、創作概念である「命の繋がり」に基づいたモチーフについての考察であり、版表現とその作品について説明する。第1節「幻想と夢—オディロン・ルドン」では、芸術行為を通じて、作品に自身の生命を呼応させたオディロン・ルドン（1840～1916年）の生涯と作品について参照する。幻想の作品世界に残された「心の投影」は、自身の制作姿勢に共鳴している。ルドンの石版画による幻想の世界では、無・無意識を連想させる「黒」によって、非現実的で超越的な精神世界へと導かれる。ルドンの幻想的な作品から、形而上的な存在（の本質）が作品という形を借りて、どのように象徴化されているのかを参照する。第2節「形態の類似性による繋がりの可能性」では、「命の繋がり」に基づく物質的観点から、生物間の形態の類似性について述べる。第3節、「制作方法及び作品について」の第1項では、本論で考察した「命の繋がり」の探求方法を基に、形而上的な観点（抽象的な描写）と、物質的な観点（写実的な描写）を画面上で連関させる制作方法及び作品について述べる。第2項・第3項では、アルミ板や石版を用いたリトグラフ制作の方法について述べ、版画作品・印刷技法の変遷について概観する。また、今後のオリジナル版画（創作版画）がどのように展開されるべきかについて論じる。

結論

本論では「命の繋がり」を形而上的、物質的な観点の2つの視点から考察した。自身の創作活動とは、精神的或は物理的な働きかけが一つの画面上で融合した上で、初めて成立するものである。現代において芸術は様々なジャンルに別れ、多様化し続けている。その中でオリジナル版画（創作版画）とは、今日までの伝統的な表現の良さ、或は尊さを軸に保ちながら、新たな表現へと更に発展する可能性を秘めている。芸術・創作版画も生命の連鎖と同様に、根源的な部分を大切に保ち、また後世に伝達する上で、新たな進化を経ているのである。

作品に描写した渦巻く線や編み目のように、根源的な生命は過去から未来にかけて渾然一体となり森羅万象の中で延々と循環を繰り返す。このような「物質的存在の本質」の推移に対して、「形而上的存在の本質」はどのような状態を経ていくのであろうか。それらの「生命の本質」を唯一形として具現化し、後世に繋いで行くことが可能であるのは、芸術という固有の分身的存在なのである。

（博士論文審査結果の要旨）

山田氏の作品は、身体のマクロコスモスと宇宙のマクロコスモスの照応関係に着目し、それを西洋の過去の巨匠たち、すなわちデューラーの技法、ルドンやゴヤのモチーフ、ブレスダンの表現方法を用いて表現したものであった。山田氏は自作のインスピレーションソースや制作動機などを俯瞰の視線で冷静に見つめ、詳細に論じた点がとりわけ評価に値すると思われる。提出作品と呼応する、優れた論文である。

（作品審査結果の要旨）

山田彩加の博士審査の作品群には根底的に生死の問題が横たわっている。これをそのまま二項対立関係を維持しながら、いくつかのキーワード“形而上、形而下”“精神と身体見えるものと見えないもの”“象徴と運動”などを繋ぐように思考し、リトグラフ版画作品へと結実させている。

作品は、女性像や動物を主題として、美術解剖学の研究書や標本から得た血管や神経細胞の構造と、作者が解釈する自然や宇宙の象徴としての植物の構造が融合変質し、奇妙で薄い重層的な構造が展開されていく、極めて緻密細密なものである。このリトグラフ作品では、モノクロームの表現が徹底される。しかし、山田のモノクローム表現は不思議と華やかさを備える。これは、コンセプトとしてネガポジであれば、ネガの部

分に触れることを続けながら、ある軽やかな明るさに至る作家の資質によると考えられるが、同時にこの気の遠くなるような制作を支える強い精神性ともめぐりあう。博士論文の中にも登場するオディロン・ルドンの“モノクロームは脳から手へと直接イメージを伝える 精神のための働き手”という言葉は、他に大きな影響関係を自覚するロドルフ・ブレスダン、フランシスコ・デ・ゴヤの制作活動とともに山田作品にとって重要な位置を占めている。

モノクロームという要素と同様に重要な問題として「紐、網目＝時間イメージ」がある。描かれたものを具体的に名指せば、単に血管や神経、木の根の形状であるが、この作品の大部分を占める網目状のイメージは、抽象的で名指ししようのない不気味さを感じるものでもある。これは、見かけの作品主題である女性や胎児の顔、動物や時計等の見えるものに対立する、影の主題となっている。無意識の言葉の寄り添わない膨大な作業であり、“見えるもの”に対立する“見えないもの”、“生”に対立する“死”として、作者は強く自覚しているのである。

以上のように本作品は、作者の精神性が繊細な理論の構築、制作上の技術に裏付けられ、大変に高質である。本審査グループはこのことを高く評価し本作を博士号にふさわしいものと判断した。

(総合審査結果の要旨)

本論文は、作品と共に絵画（美術・人間の生命そのものの在り様と変容等について）の持つ純粋な可能性を模索すると共に、自己と宇宙・自然との関係を検証する試みとして始まっている。

始めに序章として「命の繋がり」とは宇宙の誕生から過去、現在、未来を通じて全ての時間と空間の中で生じる命の連鎖であると述べてあり、その事を創作概念として確立したのは、生物間における形態の類似性に感銘を受けたことから始まっている。「生物間で見られる形態の類似性」に着目し、形態の類似性から「命の繋がり」を表現するため、制作上で生物間の形態を変容させ融合することを試みている。生命の多様な繋がりを具現化した紐状の描写を交差し、網目状に集積させた画面は、生命の誕生前と死後に見られる精神的な繋がりを表現し、現実的なモチーフが複雑に絡み合いながら一つの作品を創り上げている。

これらの制作意図に至るまでの芸術作品との出会いとして、フランシスコ・デ・ゴヤの版画、オディロン・ルドンの石版画（リトグラフ）、アルブレヒト・デューラーの銅版画、ロドルフ・ブレスダンの《善きサマリア人》等強く影響された作品を取り上げ、作者自身の作品との関連性を分析し検証する事により山田彩加の創作理念の根源を解き明かすことに成っている。

論文全体は山田彩加自身が、迷いながら手探りで実感した言葉をさぐり、実体や感触を求めている姿が写し出されている。論文として少し問題が拡張し過ぎている感があるが、完成された論文はリアリティーを強く写し出すものとなり高く評価され、審査員の承認を得た。

作品《生命の変容と融合 -0への回帰-》はリトグラフの技法によるものであり、その技術の完成度も非常に高いものである。只ひたすら描く事に集中する事が、作者自身の生命力そのものを版上に刻み付ける表現と成っていて、鮮やかな黒い線の集積として紙上に刷り取られてある。

作者自身が語る「この身体全て」と言う身体と心が一体化して生じる漠然としたものとして認識する心の本質が、強烈に描き出されて見る者を圧倒する版画作品になっている。

このシリーズの集大成となっている大作《命の繋がり-芸術的観点から探求する生命の本質-》は、誕生したばかりの不思議な光を放射する子供が画面の中心にあり、その子の一生を暗示するかのごとく成人から老いて行く様を複雑に絡み合った細胞分裂的な描写の中に描かれている。画面全体は、魅力的な深く黒い線の集積で埋め尽くされ、作者の特別な想いが伝わってくる作品は、大変高く評価されるものである。